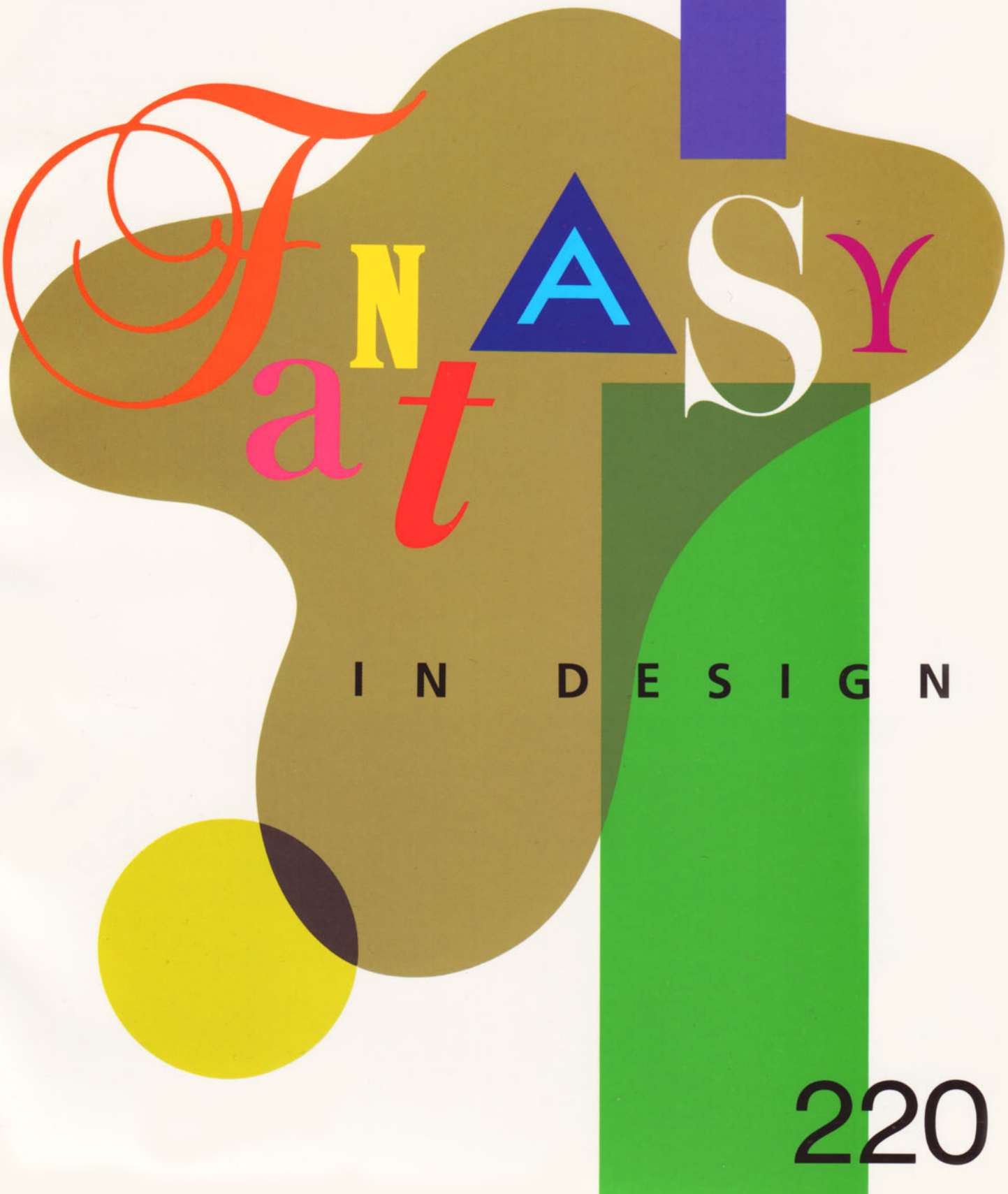
Magazine for Industrial Design

# Design News

Japan Industrial Design Promotion Organization

特集：'92世界のグッドデザイン賞




220

寒くなってしまったオーストラリアに別れを告げ、夏を求めて帰国したものの、この号が出るころには再び日本もすっかり冬、ああ嫌だ！タスケテ～！というわけで今回で最終回。

あんないい国にいるんだから、一生のんべんだらりんと暮らしてりゃいいのにとも思うのだが、そうはいかない人達がいるらしい。この忙しい東京にまで出かけてきて作品を残していたりする。その中でもっとも有名と思われるのがマーク・ニューソン。オーストラリア人にとって日本はヨーロッパよりも地理的にアクセスしやすいと言う彼。[イデー]から個性的な家具の数々を精力的に発表し続けている。「日本のデザインサポートシステムは、ヨーロッパやオーストラリアと比べても遜色ない。言葉の問題は不可避であるものの、習慣、システム等の違いのほとんどは好ましいものであり、新しいプロセスを学ぶいい機会になる。」とのこと。多くの外国人デザイナーと接してきた[イデー]という会社のサポートシステムが優れているのだろうとも思う。現在、彼のクライアントは日本、イタリアを中心に世界中に広がっている。

ジャネット・ローレンスは、アーティストとして、西武ギャラリーをはじめ多くの企画展を日本で成功させている。また、銀座のイトーキ・ギャラリーにも内装の一部として作品を残している。彼女は、アートと建築が対等でなければ建築におけるアートはそのデザインの一部になってしまう、という危惧を持っている。銀座の作品に関していえば、そのプロセスに多少不満の残るところだろう。オーストラリアでは、同じ建築家と建築物の壁面に作品を最初から埋め込む計画もある。建築家とアーティストという"表現者"同士の問題であり、一概にはいえないけれど「今まではそれぞれが、お互いの専門分野に無関心であり過ぎた。これからは相手の専門分野についてもっと勉強しなければならない。」というジャネットの意見は正論といえるだろう。そして、そのメンバーの一人が、9月にシドニーのギャラリーでジャネットとコラボレーションを行った建築事務所DCM。メルボルン、シドニー、キャンベラ、香港、ジャカルタ、そして、日本にもオフィスを構える大所帯。日本での最新プロジェクトは、まだ立ち上がったばかりで公表してもらえなかったが、三田のオーストラリア大使館は彼らの作品である。旧蜂須賀邸を保存できなかったことは非常に残念ではあるが、その敷地に新しい大使館と、職員のアパートやプールなどが建てられた。古典主義的な構成とハイテックな素材の組み合わせは威圧的で、オーストラリアに対する日本人の一般的なイメージからはかけ離れている。

彼らの作品が身をもって語っているように、そしてまた、ジャネットの作品からもわかる通り、この国のデザインやアートは、カタチの上での整然としたひとつの方向性やトレンドというものを持ち合わせていない。これは、情報が瞬時に世界中を駆け巡る現在では、程度の差こそあれオーストラリア一国に限ったことではない。ただ、住民全員に共通する長い伝統のないオーストラリアでは、とくにその傾向が強いのであろう。

アボリジニの文化に伝統を求めようとする人達もいれば、母国北欧の文化を拠りどころとしている人もいる。過去の歴史から解き放たれた人もいる。国としての脈々と流れる歴史がない以上、個々の人間のアイデンティティこそが頼りなのだ。だからこそ今後、オーストラリアのデザイナーとしてではなく、一個人としてたくさんの優秀なデザイナーやアーティストがこの国から出て来る期待が持てるのである。

バウハウスのスタイリングの輸入以来、カタチの模倣と精神の宿っていないオリジナルデザインとを繰り返してきた東洋のハイテク・アイランドが、南半球の新参者に追いつかれる日は意外と近いのかも知れない。

## Australian Design Report — それゆけカンガルー！

# 海を越えたカンガルー達

### 個々のアイデンティティから生まれるデザイン　　酒井俊彦

❶[ICE/FIRE]ミクストメディア(D＝ジャネット・ローレンス)
❷イトーキ・ギャラリーに展示されたローレンスのミクストメディア
❸[オーストラリア大使館](D＝DCM)
❹チェア(D＝マーク・ニューソン)







